

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(S)

研究期間：2009～2013

課題番号：21222001

研究課題名(和文)ユーラシアの近代と新しい世界史叙述

研究課題名(英文)Eurasia in the Modern Period : Towards a New World History

研究代表者

羽田 正 (HANEDA, Masashi)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：40183090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 96,600,000円、(間接経費) 28,980,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル化が急激に進む現代において、山積する地球規模の難問を解決するためには人々がともに地球に帰属しているという意識を持ち、互いに協力し合うことが必要である。地球への帰属意識を生み出すために、私たちは世界の人々が共有できる世界史を描くことを試みるべきだ。本研究を通じて日本語で世界史を論じる場は形成された。

しかし、日本語の「世界史」と英語のWorld HistoryやGlobal Historyが意味する内容は異なっている。地球市民の世界史を実現するためには、まず世界の人々が互いの「世界史」認識を理解しあい、議論のためのプラットフォームを準備することから始めなければならないことが明確となった。

研究成果の概要(英文)：In this rapidly globalized contemporary world, people need to have a consciousness that they belong to the earth and have to work together to solve a pile of global and difficult problems. To create the identity of global citizen, we have to try to describe a world history which could be shared by people of the world. Through our five-year cooperative research project, we are successful in making a common ground where we can discuss world history in Japanese. However, the meaning of world history in Japanese is not the same with world history or global history in English. So is the case with French or Chinese. To realize a world history for global citizen, people of different countries have to understand the perception of world or global history in the language of others and prepare a platform for discussion.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：世界史 異文化交流 比較歴史学 グローバル・ヒストリー ユーラシア

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進み、人々に「地球市民」意識が求められる現代においては、世界の歴史を一体のものとして把握・理解することが必要である。「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」を区分する従来の世界史叙述は、この点で不十分だが、日本はもちろん、世界的に見ても、「地球市民」のための世界史叙述はまだ存在していない。

2. 研究の目的

この共同研究では、「国民国家や「ヨーロッパ(西洋)とアジア(東洋)」という既存の歴史叙述の単位にとらわれず、ユーラシア、さらに世界を一体と見る立場で新しい世界史を構築する方法を追究する。

3. 研究の方法

18-19世紀のユーラシアで、港町や内陸の隊商都市を基点として設定される多様な場(都市、地域社会、国家、海域世界など)における異文化交流(人・モノ・情報の受容、融合、拒絶)の実態を、史資料に基づいて具体的に明らかにする。そのうえで、研究成果を、同一の場における時間軸上の比較、多様な場同士の多面的な比較を通じて総合的に把握し、18-19世紀のユーラシアの歴史を一体としてとらえる視点の獲得を目指す。研究成果は日本語と英語でホームページを通じて随時発信する。

4. 研究成果

多彩な研究活動を踏まえ、様々な波及効果が出ている。例えば研究代表者羽田正についていえば、その著書『新しい世界史へ』(岩波新書)は、歴史研究者や高校で歴史教育に携わっている教員のみならず、一般市民にも大きなインパクトを与えた。大手新聞や雑誌に書評や関連記事が掲載されたことから、そのことは証明される。現状の世界史解釈に関して、日本の歴史学界や高校教育の現場に問題を投げかけ議論を巻き起こすという羽

田の意図は、十分に達成されたと判断できる。一方、羽田は外国の研究者とも積極的に意見交換の機会を設け、これまでに上海(中国)、リヨン(フランス)、ベルリン(ドイツ)、モントリオール(カナダ)、ナポリ(イタリア)、プリンストン(アメリカ)、東京で国際研究集会を開き、諸外国の研究者と世界史の解釈と叙述の方法についての議論を行った。いわゆる「グローバル・ヒストリー」とは異なる部分もある「新しい世界史」という考え方を、諸外国の研究者が簡単に理解し、全面的に受け入れているわけではない。しかし、議論を重ねることで、その考え方に関心を示す研究者が次第に増えてきていることは確かである。とりわけ研究期間の後半では、世界史の理解と叙述の仕方についての国際研究集会で徹底的に議論が交わされた。このように、できるだけ多くの外国人研究者と話し合う機会を作ることで、この共同研究を世界的にみてもインパクトのあるものに昇華させることができたと考えている。共同研究開始時には、様々なバックグラウンドをもつ歴史研究者が、世界史叙述に関心をもちながらも、研究を進めるための確たる指針なしにただ集まっただけの状態だった。しかし、3年を経た時点で、参加者全員が一つのチームとしての自覚を強め、新しい世界史叙述について考え、それを実現するために研究を進める態勢が整った。その後の2年間、国際会議や共同研究の枠組みで開催される数多くの研究会を通し、現代を生きる我々にとって有意義な世界史とは何かということを改めて問い直すためのプラットフォームとして機能することができた。日本における歴史研究は、地域・時代別に細分化され、全体について語る場を長く持たなかった。この共同研究がそのためのプラットフォームとして確立したことは大きな意味を持ちもっとも大きな成果であるといえる。グローバル化が急激に進む現代において、山積する地球規模の難問を解

決するためには人々がともに地球に帰属しているという意識を持ち、互いに協力し合うことが必要である。地球への帰属意識を生み出すために、私たちは世界の人々が共有できる世界史を描くことを試みるべきだ。本研究を通じて、日本語で世界史を論じる場は形成された。しかし、日本語でいう「世界史」と英語の World History や Global History が意味する内容は異なっている。中国語やフランス語の場合も同様である。地球市民の世界史を実現するためには、まず世界の人々が互いの「世界史」認識を理解しあい、議論のためのプラットフォームを準備することも同時に明らかとなった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 36 件)

一般学術論文

1. 羽田正「空間概念の歴史の意味とイスラームの東方への伝播」国際歴史学韓国委員会編『世界史の中のイスラーム』2013年、138-142頁、査読無。
2. Sugiura Miki, “Specialization and the Division of Merchant Functions in Amsterdam and its Hinterland in the Eighteenth Century”, Robert Lee (eds.), *Port-Cities and their Hinterlands: Migration, Trade and Cultural Exchange from the Early Seventeenth-Century to 1939* (Explorations in Economic History), Routledge, forthcoming 2015, 査読有。
3. 羽田正「不对等的悖論 非西方语言于认识世界的意义」『复旦学报 社会科学版』2011年、第2期 No.2, pp.17-20頁, 査読有。
4. 羽田正「インド洋海域世界とイスラーム」橋寺知子, 森部豊, 蜷川順子, 新谷英治共編『アジアが結ぶ東西世界』関西大
- 学出版部, 2011年, 116-124頁, 査読無。
5. Matsukata Fuyuko, Adam Clulow (trans.), “Reevaluating the “Recommendation to Open the Country”: The King of the Netherlands 1844 letter to the Tokugawa Shogun”, *Monumenta Nipponica*, 66-1, 2011, pp.99-122, 査読有。
6. 岩井茂樹「朝貢と互市」『東アジア近現代通史 1 東アジア世界の近代 一九世紀』岩波書店, 2010年, 134-153頁, 査読無。
7. 島田竜登「世界のなかの日本銅」荒野泰典, 石井正敏, 村井章介編『近世の世界の成熟』日本の対外関係 6, 吉川弘文館, 2010年, 305-319頁, 査読無。
8. Shimada Ryuto, “Siamese Products in the Japanese Market during the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, Yoko Nagazumi (ed.), *Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia; Essays in Honor of Leonard Blusse* (Toyo Bunko Research Library 13), The Toyo Bunko, 2010, pp.147-165, 査読無。
9. 島田竜登「オランダ東インド会社とアジア・ネットワーク 比較研究を念頭にした近世バタヴィア都市史の試み」深見奈緒子監修『生態系から見た都市とそのネットワーク 海域世界をめぐる』第3回全球都市全史研究会報告書(総合地球環境学研究所・メガ都市プロジェクト), 2010年, 43-51頁, 査読無。
10. 松井洋子「ジェンダーから見る近世日本の対外関係」荒野泰典他編『日本の対外関係 6 近世の世界の成熟』2010年, 93-121頁, 査読無。
11. Matsukata Fuyuko, “From the Threat of Roman Catholicism to the Shadow of Western Imperialism: Changing Trends

in Dutch News Reports Issued to the Tokugawa *Bakufu*, 1690-1817”, Nagazumi Yoko (ed.), *Large and Broad: The Dutch Impact on Early Modern Asia; Essays in Honor of Leonard Blussé* (Toyo Bunko Research Library 13), The Toyo Bunko, 2010, pp.130 - 146, 査読無.

12. 岩井茂樹「广州与长崎 清廷透视中的互市与海外华人」 Evert Groenendijk, Cynthia Viallé, Leonard Bulussé (eds.), *Canton and Nagasaki Compared 1730-1830 Dutch, Chinese, Japanese Relations, Institute for the History of European Expansion*, IGEER, 2009, pp.29-43, 査読無.

〔学会発表〕(計 69 件)

国際学会等での講演・報告

1. Haneda Masashi, “Towards a History of the World for Global Citizens”, Workshop on Maritime Perspectives in Eurasian and Indian Ocean World History: Towards a Global History, Indian Ocean World Centre, 2013 年 2 月 17 日, マギル大学.
2. 羽田正「未来のための世界史」中国社会科学院世界歴史研究所研究会, 2013 年 4 月 9 日, 中国社会科学院世界歴史研究所.
3. Haneda Masashi, “Is the Framework of East Asia Effective in Designing New World/Global History?”, Workshop East Asia in World History: Dialectics Between the National and Global, 2013 年 6 月 22 日, ベルリン自由大学.
4. 羽田正「東アジアにおける近代」東大東洋文化研究所、京大人文学研究所、成均館大学東アジア学術院共催国際シンポジウム「東アジアの『記憶』」、2012 年 1 月 27 日, 成均館大学.
5. Haneda Masashi, “A New World History and its Limits?”, UCP Final, 2012 年 1 月 12 日, 東京大学.
6. 羽田正「世界史と地域史」「世界史/グローバル・ヒストリーの文脈における地域史: 文化史の事例研究」東京大学東洋文化研究所主催、復旦大学文史研究院、プリンストン大学東アジア研究所・学部共催、2011 年 12 月 19 日, 東京大学.
7. Haneda Masashi, “Introduction of the Concept of the ‘Islamic World’ into Japan and a World History in Japanese Style”, Todai Forum 2011 in France, Workshop, Local History in the Context of World/Global History, リヨン高等師範学校, 2011 年 10 月 20 日.
8. Haneda Masashi, “Modernity and World History”, International Workshop, “Sites of Modernity”, 2011 年 7 月 20 日, チュラロンコン大学.
9. Haneda Masashi, “The Concept of the ‘Islamic World’ in Japan in the 1930s and its Significance on the Japanese Worldview”, 2011 年 5 月 5 日, 招待講演会, プリンストン大学.
10. 羽田正「東アジアにおける知の流通 近代を中心に」東大東洋文化研究所、京大人文学研究所、成均館大学東アジア学術院共催国際シンポジウム, 2011 年 1 月 28 日, 京都大学.
11. Haneda Masashi, “The Paradox of Asymmetry: The Significance of Discussing the World in Non-European Languages”, Asia in the Early Modern World: Intellectual History in India, China, Japan, Korea and Europe, 2010 年 11 月 2 - 3 日, 復旦大学.

12. 羽田正「新しい世界史を構想する」北京
大学歴史学科主催研究会, 2010年9月6
日, 北京大学.
13. 羽田正「新しい世界史を構想する」韓国
漢陽大学校東アジア研究科主催研究会,
2010年6月4日, 漢陽大学校(韓国).
14. 羽田正「アジアの港町研究から新しい世
界史へ」韓国海洋大学校研究集会, 2010
年1月28日, 韓国海洋大学校.
15. Haneda Masashi, "Eurasia in the Modern
Period: Towards a New World History",
5th LIA Workshop, Comparative Approach
in Social Sciences and Humanities, フ
ランス C N R S + 東京大学社会科学研
究所・東洋文化研究所, 2009年12月
17-18日, Maison des sciences de
l'homme (フランス).
16. Haneda Masashi, "Introduction. Canton
and Nagasaki Compared", Canton and
Nagasaki Compared 会議実行委員会主催,
2009年11月30日-12月4日, 東京大学.
その他、分担者および連携研究者の口頭発
表は、下記ホームページに掲載しており、記
載を省略する。
<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/eurasia/>

〔図書〕(計8件)

単著

1. 羽田正『新しい世界史へ 地球市民のため
の構想』岩波書店、2011年、220頁。
2. 松井洋子『ケンペルとシーボルト 「鎖国」
日本を語った異国人たち』山川出版社
(日本史リブレット62)、2010年、94頁。
3. 松方冬子『オランダ風説書 「鎖国」日本
に語られた「世界」』中公新書、中央
公論新社、2010年、216頁。

編著

4. 羽田正編『海から見た歴史』東京大学出
版会、2013年、304頁。
5. Haneda Masashi (ed.), *Itinerario*
Vol. xxxvii, issue 3, Special

Issue :Canton and Nagasaki Compared,
2013, 206p.

6. 松方冬子編『別段風説書が語る 19世紀
翻訳と研究』東京大学出版会、2012
年、365頁。
7. 羽田正「东亚海域史の実験」復旦大学文史
研究院編『世界史中的东亚海域』, 2011
年、1-10頁。
8. Haneda Masashi (ed.), *Asian Port Cities*
1600-1800. Local and Foreign Cultural
Interactions, NUS Press & Kyoto
University Press, 2009, p. 233.

〔その他〕
ホームページ等
<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/eurasia/>
(日本語)

<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/english/eurasia/>
(英語)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

羽田 正 (HANEDA, Masashi)
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号: 40183090

(2) 研究分担者

松井 洋子 (MATSUI, Yoko)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号: 00181686

杉浦 未樹 (SUGIURA, Miki)
法政大学・経済学部・教授
研究者番号: 30438783

岩井 茂樹 (IWAI, Shigeki)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号: 40167276

松方 冬子 (MATSUKATA, Fuyuko)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号: 80251479

島田 竜登 (SHIMADA, Ryuto)
東京大学・大学院人文社会系研究科・
准教授
研究者番号: 80435106

深沢 克己 (FUKASAWA, Katsumi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・
教授
研究者番号：60199156
(平成22年度より連携研究者)

(3)連携研究者

太田 淳 (OTA, Atsushi)
広島大学大学院・
文学研究科総合人間学講座・准教授
研究者番号：50634375

岡 美穂子 (OKA, Mihoko)
東京大学史料編纂所・助教
研究者番号：30361653

工藤 晶人 (KUDO, Akihito)
学習院女子大学・国際文化交流学部・
専任講師
研究者番号：40513156

杉本 史子 (SUGIMOTO, Fumiko)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：10187669

杉山 清彦 (SUGIYAMA, Kiyohiko)
東京大学大学院・総合文化研究科・
准教授
研究者番号：80379213

長島 弘 (NAGASHIMA, Hiromu)
長崎県立大学・経済学部地域政策学科・
特任教授
研究者番号：10145964

姫野 順一 (HIMENO, Junichi)
長崎大学・環境科学部・教授
研究者番号：00117227

松浦 正孝 (MATSUURA, Masataka)
長崎大学・環境科学部・教授
研究者番号：20222292

水井 万里子 (MIZUI, Mariko)
九州工業大学大学院・工学研究院・
准教授
研究者番号：90336090

村尾 進 (MURAO, Susumu)
天理大学・国際文化学部・教授
研究者番号：10239478

村上 衛 (MURAKAMI, Ei)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：50346053

守川 知子 (MORIKAWA, Tomoko)
北海道大学大学院・文学研究科・准教授
研究者番号：00431297

森永 貴子 (MRINAGA, Takako)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：00466434

弓削 尚子 (YUGE, Naoko)
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：10329055

大峰 真理 (OMINE, Mari)
千葉大学大学院・人文社会科学研究科・
准教授
研究者番号：70323384

八百 啓介 (YAO, Keisuke)
北九州市立大学・文学部・教授
研究者番号：20202269

横山 伊徳 (YOKOYAMA, Yoshinori)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号：90143536

和田 郁子 (WADA, Ikuko)
京都大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：80600717

鈴木 英明 (SUZUKI, Hideaki)
東洋文庫・研究部・特別研究員
研究者番号：80626317